

学校訪問④

地域の自然・歴史・文化に学ぶ

落合小学校

市内の小学校の特色ある活動などを紹介する「学校訪問」。第4回は、落合小学校（落合町阿部・吉川昭校長）です。全校児童数242人と市内で2番目に多い同校からは、子どもたちの元気な様子を中・高学年の取り組みで紹介し



ヒョウタン作りの様子



騎馬線「阿部の陣」

ヒョウタン作りを行っています。地元の田中藤一さん(78)の指導で、5月苗作りからスタート。収穫までの間、児童は水やりなどし、大切に育てました。8月下旬には長さ40センチを超える立派なヒョウタンを収穫。「大きなヒョウタンができて嬉しいです。種がなかなか出てこなくて難しかったけど、取れたらすっきりしました。ヒョウタンアートを作るのが楽しみです」と4年生の井上蓮くんは嬉しそう。絵付けなどをするとヒョウタンの完成です。

阿部地区には、戦国武将・山中鹿之助の墓(胴塚)があり、歴史的にも貴重な戦国時代の足跡が残っ

ています。この歴史を生かしているとうと行われているのが、小学校運動会での騎馬戦「阿部の陣」。毎年5・6年生が、鹿之助が仕えた「尼子氏」と敵方「毛利氏」の戦いを、紅白対抗で再現しています。「最後の大将戦は、結構長く戦ったので、手が汗ですべりました。でも最後に勝ってよかったです」と6年生の黒川拓志くん。

松前館長の説明を聞く児童たち



神戸の中学生が農村体験

内藤 孝さん

(高梁市中央高原三地域懇談会座長)

地域交流によるまちづくりを進めようと、宇治町、成羽町中・吹屋で組織する同懇談会が主催し、神戸市立本山中学校2年生208人を、農家66戸で受け入れました。

都会育ちの子どもたちに、秋の収穫体験や農村の行事を通じ、農業の厳しさや楽しさを感じてもらいたい良い思い出となるよう、各農家はそれぞれ工夫し取り組みました。

過疎化や少子化で子どもたちと触れ合う機会が少なくなっているこの地域にも、久々ににぎやかな声が聞こえ、楽しいひとときを過ごすことができました。

この事業が定着し交流の輪が広がるよう、今後も取り組んでいきたいと思えます。



サツマイモを収穫して、にっこり



はた おり 機織の世界に魅せられて

機織教室(成羽町)



教室での作業の様子

カタン、コトンと機織の音が響く中、和気あいあいと楽しそうな話し声が聞こえてきます。成羽町の機織教室の皆さんです。現在、60〜80歳代の女性10人で活動しており、倉敷民藝館で機織の技術を学んだことのある西江寿子さんが指導に当たっています。

公民館内の整理中に機織機が見つかり、西江さんらに、活用できないかと教育委員会から相談があったことがきっかけで、平成10年6月に教室がスタート。月3回、午後1時から4時まで開かれており、日程は前の月の最後の教室で、皆さんの都合を調整して決めるそうです。

「二つと同じものができないのが、機織の魅力」と声を揃える皆さん。同じ経糸を使っても、使う緯糸や織り手によって、さまざまに趣きの異なる織物が仕上がります。

「着物などを裂いたものを緯糸に使う『裂き織り』は、思いもよらない模様になったりしておもしろいですよ。でも、織りに入るまでの作業が本当に大変」と話される保田登志子さん。糸の染色、糸巻き、織巾に合わせて経糸の本数と長さを決める整経、機織機にセットするために荒オサ通し、巻き取り、綜統通し、箆通しといった、いくつもの細かい根気の必要な作業を経て、やっと織りの作業が始まります。

織り上げるまでには、小さいものなら3時間程度、大きいものだと1週間以上かかることもあるとか。ストールやマフラー、さらには織物を使って手提げかばんや小物入れなど、さまざまな作品が作られます。「今は機織機が3台で作業が思うように進まないこともあり、それが悩みです。もしご家庭で使わなくなったものがあれば、ゆずっていただけるとありがたいですね」と小川美貴恵さん。

西江さんは「昔は当たり前だった機織の光景も、今では目にする機会もほとんどなくなりました。昔の人の技を受け継ぎ、また活動を通じて子どもたちにも伝えていくことができれば」と話されています。

機織教室の皆さんの作品は、10月30日(金)〜11月1日(日)のなりわ文化祭(会場・成羽総合福祉センター)で展示されます。